輝け商店街（11）

松山市・2

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

夜の中心地を歩く 温かい伊予なまり

ホテルを出て西堀端から、松山市駅へと夜のまちを足で確めた。

年配の人に道をたずねると「どちらから、ようおいでなたなー」、松山なまりは人なつっこく温かい。

まちを行くと文学に出会う。夜八時半。アルファテステイツ市駅前に立った。

正岡子規は慶応三（一八六七）年九月一七日、この地に生まれた。生家は東西の道路の南側にオロ垣（竹の枯れ枝）を結い、垣の内にはサンゴ樹の並んだ家であったという。

子規の本名は常規（つねのり）であるが、近親者は生涯を通じて「のぼさん」と呼んでいた。

後に雅号を「野球（のぼーる）」と名乗るほど野球が好きで、日本の草分けとなった。愛媛県が野球王国となった源流がみえる。

朝敵の汚名に耐えた 明治維新

正岡子規が生まれたころ、松山藩は逆境に喘いでいた。

一四代藩主の松平定昭は二二歳、史上最年少で老中に就任するが、一カ月あとに大政奉還となる。鳥羽伏見の戦いに将軍慶喜に従ったため、朝敵の汚名を受ける。

一月に新政府から追討を受け、土佐藩に松山城を接収された。今も「覚・この地当分土佐少将お預け候事・慶応四年正月・奉行」と掟書きの告示板が残っている。

藩主は蟄居（ちっきょ）して恭順の意を示し、一五万両の軍費を供出した。松山藩が許されたのは五月になってからだった。藩の財政は苦しく、藩士の暮らし向きも貧しかった。

子規は貧しさに耐えながら、志は高く、よく学んだ。やがて近代文学史上、大きな足跡を残した逸材の幼少がここから始まったのだ。

松山大街道商店街

銀天街から大街道に

午後八時四三分、銀天街に蛍の光が聞こえる。三割ほどは閉店しているが、数百メートルも続くアーケードはまだ明るい。街路灯に下がっている小中学生の俳句が読める。

「蝉しぐれ『今をいきよ』と教えられ」―伊台小六年西川千晶―。人生を歌う深さは、とても小学生とは思えない。

「スイカ割り一発で割る剣道部」―久枝小四年木下勝矢―。活気とユーモアーがあふれている。ここにも子規が生きている。

勤め帰りのOLなど、たくさんの人が通る。

「みんな上手な句ですね」と話しかけると、「ありがとうございます。ゆっくりお楽しみください」と礼儀正しい答えが返ってきた。

大街道商店街に出ると道幅がぐんと広くなる。

夜九時というのに人が多い。学生のグループ、ナップを背にした若者、自転車を引きながら歩く中年の男性などいろいろだ。婦人服店の前で、ギターを奏でて歌う二人のストリートシンガーの歌声が賑やかだ。

復元された愚陀仏庵　松山市立子規記念博物館

アーケードを支える太い柱は、うすく銀色の果樹を描いて目障りにならない。道の石畳には、ところどころ坊っちゃん列車や松山城など、名所が描かれている。

明るいまちなのにパチンコやゲーム屋が多いのがいささか寂しい。

漱石が文学に目ざめた愚陀仏庵跡碑

大街道を少し西に入ると、愚陀仏庵跡碑がある。「愚陀仏」とは漱石の俳号。明治二八年に漱石と子規が一緒に下宿していた上野邸の離れがここにあった。昭和二〇年の大空襲で焼失したので、市立子規博物館に復元されている。

漱石が二階で暮らし、子規は一階に療養のために身を寄せた。

ここで詠んだ句「桔梗いけてしばらく仮の書斎かな」が残されている。

漱石は子規を訪れてきた人たちと一緒に俳句を作るなど、交流を通じて、文学表現の面白さに目ざめたという。

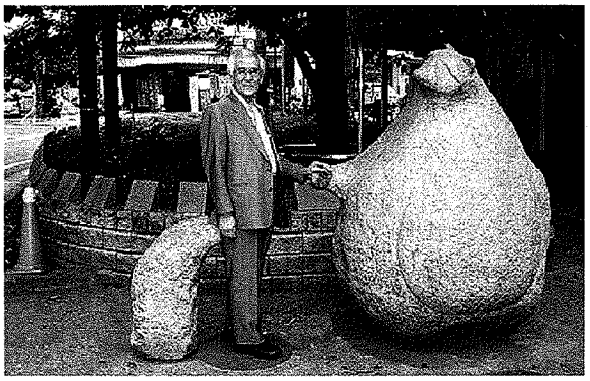
狸がご縁で札幌と姉妹商店街

大街道との境目の交番前にユニークな狸の石像が立っている。

だるまのようにずんぐりといかにも呑気そう。札幌狸小路商店街と松山中央商店街連合会が、平成一三年二月、狸が取り持つ縁で姉妹商店街となり、交流を深めている。石材協同組合の協力で雄雌二体が作られた。

周囲の花壇は、番町小学校の子どもら五〇人が育て、春秋二回、一斉にここに植え、日専連松山が管理している。

「まつやまマイロード」の立て札に、「私たちが大切に育ててきました」、「もう少し一緒に歩いてみますか」などと書かれたその前で、若いアベックが写真を撮っている。いかにものどかな感じだ。



狸が取り持つ縁で札幌狸小路商店街と姉妹商店街となった

狸伝説の多いおおらかな松山

松山には狸の伝説が多い。弘法大師が利口者の狐を大変可愛がった。

しかし、狐は頭が良くて、よく人を騙して困らせたので四国から追放され、その代わりに狸が可愛がられるようになったとか。

大きな腹に大福帳をぶら下げた狸の置物は、見るからに滑稽で、どこでも見かける人気者。

商店街にはよく狸が祭られている。狸には八つの徳があるという。お腹をなでると安産、大福帳をなでると商売繁盛など。

「隠神刑部狸」は、伊予の狸の総元締。天智天皇の時代から松山城周辺に住み着き、享保時代の大飢饉の際に起きた松山藩のお家騒動にもかかわる。

久谷の山口霊神前に石碑が建っている。

神社の宮司のお使い狸として活躍し、晩年にはなんと、大阪にて旅館経営までしていたという金平狸。坊ちゃん列車に化けて人を驚かせたという毘沙門狸までいる。

狸のお話が多い松山。その大らかでユーモアーを好む市民性がよく表れている。

戦後復活したL字商店街核の撤退と客足減少

この商店街は、松山の商人たちが守ってきた。

昭和二〇年七月の大空襲で商店街は焼け野原となったが、仮店舗を建てて営業を始めた。

昭和二一年、三越が大街道で木造平屋で営業開始したのをきっかけに、湊町・大街道の復旧にはずみがかかった。

昭和二八年に銀天街湊町に、昭和五七年に大街道とそれぞれアーケードが完成、今も四つの商店街のすべてを覆っている。

全長一キロメートル、L字型の両先端に、北は大街道の松山三越、ラフォーレ原宿松山、西は銀天街のいよてつ高島屋を据える。三核二モール、L字型の理想的な商店街。一、二、三番町はビジネス街、県庁・市役所などの公共施設とを結ぶ、ます型の一角が松山の商業のメッカとなった。

しかし、平成一一年にサティに続き、ダイエーなどの核店舗の撤

退が、来街者の減少傾向へと流れを変えた。

平成一三年、いよてつ高島屋の増床で増加の兆しが見えた。しかし、再び衰退ムードとなり客足の減少を招いた。

守られた中心市街地の商業

中央商店街は自営の店舗が減りテナントが増えた。テナントは出入りを繰りかえすが、空き店舗率は低い。

銀店街一六三店舗のうち七店、大街道は一七〇店舗のうち五店に過ぎず、平成一三年度の六％から一七年度は五％に減った。

松山市中心の番町などの商店街の年間販売額は、平成九年度の一四一六億円をピークに、一六年度では一一七七億円と減少を辿ったが、ここにきてようやく下げ止まった。

松山の中心商店街は、他都市のような壊滅的な打撃をまぬがれた。その要因は三つある。県全体を商圏としていること。超大型店の出店が少なかったこと。何よりも、目ざめた商業者の活動がまちを危機から守ったことだ。

だが松前町をはじめ、県内大型店の増加と競合によって、商況の厳しさは予断を許さない状況にある。

商業調和を保った大店法

大型小売店が無秩序に出店すれば、既存の小売店が打撃を受ける。住居の近くで買い物ができなくなった消費者も生活便利性を失う。そのため昭和一二年に百貨店法が作られ、百貨店の出店を許可制にした。

戦後、大手スーパーの無秩序な出店で、中小零細の小売店は市場を失い、商店街は日増しに衰えていった。

しかし、スーパーは百貨店法の対象とはならなかった。商業者が立ち上がり、法改正にむけて運動が高まった。

ようやく大手スーパーも規制する大店法ができたのは、昭和四八年のことだった。

今、実る近代協の教訓

大店法は調整主義をとった。学識経験者・消費者・商業者の三者からなる商調協を設けた。そこで協議し合い、売場面積などの妥結点を見いだした。

まさに、日本的な調和を求めた智恵だった。当時の中曽根康弘・通産大臣は、これを「運用の妙」と言った。

それらを実現するため、近代化協議会が結成され、各地で運動が繰りひろげられた。

その町の人口と消費生活に必要な総小売面積を測定した。大型店と既存の小売店が共存できるラインを協議した。

松山商店街の三段組織

当時、平松泰三理事長（現・会長）率いる日専連松山は、先頭に立って市民とともに活動を推し進めてきた。

大型店の過度の出店による被害を阻止する必要性を痛感して、商店街連盟・睦月会・近代協の三段組織を作った。

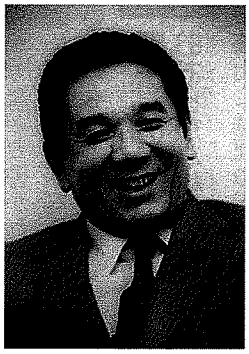
睦月会は政治結社で、当時の白石春樹・愛媛県知事の誕生月にちなんだ。会員は店主、婦人、青年、店員の四部会からなる二〇〇〇名。知事選挙には会費一〇〇万円の政治献金を拠出して協力した。

この三段組織の組織活動は、やがて愛媛県に広がり三市が同調。商店街の結束と大型店対策のモデルケースとなり、政治面でもその存在価値を見直す所となった。

松山方式といわれる総量規制と一括審議を生み出した。結果として大型店の過剰出店をセーブし、中心市街地の空洞化を防いだ。

日専連も当時の薗田純雄理事長がこの方式に嘱目して、政策委員会を発足。政治活動の強化に力を注ぐこととなった。

今、少子高齢化の時代。住居の近くで必需品の買い物ができ、明るくて安全な環境が求められる。それが維持できた。近代協の闘いは小売商のエゴではなかった。まちと市民生活を守った。



第７代日専連理事長
平松泰三氏

店舗が減り、売り上げ横ばい 小売業一〇年間の動向

日本全体で小売総額が減るのに、大型店の出店が加速し、売場面積が増え、中小店が姿を消している。

松山市の小売業は、平成一六年までの一〇年間で、店舗数は一八％の約一〇〇〇店も減ったが、売場面積は約九万平方㍍、一八％も増えた。従業者は三三一三人増えた。

販売額は平成九年度の六一九八億円をピークに一六年度は五六三三億円に下がった。

中小店の販売シェアを大型店が浸食した結果だ。

しかし、この数値は他の都市と比べて、商業への被害が少なかったことを物語っている。

ちなみに、高松市の場合は平成六年から一六年までに、売場面積は二一万二〇〇〇平方㍍増えたが、販売額は三三％減って四九五六億円となっている。

小売業動向		平成６年	平成16年	差引増減
販売額（億円）	松山市	5,685	5,633	△52
	高松市	7,092	4,956	△2,136
売場面積（平方㍍）	松山市	502,674	593,372	90,698
	高松市	396,511	608,901	212,390
事業所	松山市	5,490	4,457	1,033
	高松市	4,828	3,751	1,077
従業員（人）	松山市	28,888	32,201	3,313
	高松市	25,809	26,015	206

松山市と高松市の小売業動向

松山の商業者が、まちづくりと商業の活性化を守って活動したたまものである。

藩校跡に夏目漱石が教えた中学校

九時半ごろ、県庁前通りから市役所向かいのNTT愛媛支店に出る。藩校の明教館がここにあった。文政一一年（一八二八年）藩士の文武稽古所として建てた。

廃藩置県のあと勝山学校・松山中学校（現松山東高等学校）となり、近代教育の拠点となる。

夏目漱石ゆかりの中学校だ。明治二八年、漱石はここで英語を教えた。

当時、校庭にそびえていたユーカリの樹が、記念碑にそえて植えられている。

「わかるるや一鳥啼いて雲に入り」

漱石は、松山を去るに当たってこう歌った。町灯りに透かしながら石碑の句を読む。

みんな大切な人 ことばが息づく松山

電車が通る。「あなたにとっては他人でも、かけがいのない人です」と車体に大きく書いてある。コマーシャルではない。

「日本のことばが息づくまち」を目ざし、心に訴える松山市の試みだ。

市庁舎一階のホールには、今評判の歌「恋し結婚し母になったこの街で　おばあちゃんになりたい」の、大きなたれ幕が下がっている。さすが文化の街、松山である。

お掘端にでる。八股榎木大明神と書いた赤いのぼりがゆれている。暗くてなかは見えないが、松山一の美女狸と噂のたかい「お袖狸」がここにいるのか。

おっと、だまされないうちにホテルに戻ろうと歩幅を広げた。

ゆかしさ味わう山里柿

歩き疲れて甘いものが欲しくなった。いただいたのは「山里柿」。本物の干し柿を使った味は奥ゆかしい。茶人だった柳桜堂の先代が作った銘菓と聞いて納得がいった。

夜空に浮き出た天守閣をゆっくりと眺めながら松山の歴史を偲んだ。

「城が見えますよ」と、このホテルを選んでくれた日専連松山の配慮が、しみじみありがたい。

松山は、温かく人を動かす言葉のまちだった。屋根のない博物館を目ざして一生懸命に努力するまちの熱意が伝わってくる。

お城はまちのシンボル 市民の誇り

徳川家康の甥にあたる松平定行から、廃藩置県まで一五代の間、親藩一五万石、伊予の国随一の名門として栄えた。

幕末には一転した。朝敵として追討され、土佐藩に支配されるなど、逆境に耐える。

やがて、新しい日本への坂道を登っていった明治の松山の人たちの心意気。

落雷、放火など再度の焼失を乗り越えて、今にそびえるお城は松山市民のシンボルであり、誇りなのだ。

天上影は変わらねど栄枯は移る世の姿。お城のライトアップが消えても、深夜までまちの車の灯りは絶えなかった。

「愛媛」の地名は遠く古事記にさかのぼる。「伊予の国は愛比売と謂い」と記され、織物に優れた女性という意味とか。古くは道後温泉が政治・経済の中心地で、聖徳太子も訪れた記念の石碑が建っている。